



社会の中で生きるクリエイティブ



シリアスと笑いのバランス

宮本 2007年10月、カンボジアにあるアンコール小児病院の設立10周年を記念した「Gift to Children of Angkor」という写真集を出しました。制作に携わったスタッフはすべてボランティアで、収益の一部が病院に寄付されるようになっていきました。1冊売れると3人の子どもたちが助かることに繋がります。

野村 僕もこの前カンボジアに行ってきましたよ。内戦で失われたカンボジアの伝統音楽を



復興しようと、楽器を復元し、子どもたちに教えている音楽家を訪ねました。

宮本 カンボジアの伝統音楽はいいですね。でも現地ではCDを買ってきても、再生できないものがけっこうあるんですが(笑)。

野村 僕が買ったCDはちゃんと音が出るので、今度貸してあげますよ。僕は作曲家ですけど、演奏もします。子どもたちと一緒に作曲するのが好きなんです。これまでに横浜のズーランシアの動物たちと即興で作曲したり、最近はこちらと一緒におペットボトル60本を使ったコンサートをしたりしています。

田村 動物？

野村 この映像(P26※)をつくった時は、オ

アアクリイに鍵盤を弾いてもらいました。

田村 オオアクリイですか。(写真を見て)うわほんとだ、すげえ。

野村 基本的に音楽のジャンルを限定せずに、やりたいことは何でもやっています。

宮本 田村さんもバンド活動をされていますね。

田村 そうなんです。もともと芸人というカテゴリーの中にいて、最近はバラエティ番組の司会をすることが多いんですが、2005年からjealkbというビジュアルバンドのボーカルをしています。そもそもバンドを始めたきっかけは、芸人とは違う立場で、何か新しい表現をできないかと考えたことです。例えば去年は、風とロックの箭内道彦さんとロックンロール食堂の榊田倫広さんと、PVというメディアを使って何か社会の役に立つことをやろうと考え、当時とてもショックを受けた「リンゼイ・アン・ホーカーさん事件」の捜査に協力するPVを、ご遺族の協力を得て、制作しました。さまざま事情があり、まだ大々的には流せていませんが。

野村 芸人とは違う立場でということは、要求されることが違うということですか？

田村 そうですね。もしカンボジアの子どもの事実を伝えようとしても、芸人というフィルターを通すと、茶化したようなイメージになってしまいかねない。でもだからといってシリアスぶるつもりもなく、バンドは7人編成なんですけど、2人は楽器を演奏していないんですよ。楽器を持っているんだけど、弾くふりをしてる。そういうちょっとコミカルな部分を残しているから、芸人である自分もキープできています。バンドで新しいことを伝えることもできているのかなと思っています。



宮本 田村 野村

MIYAMOTO KEIBUN

NOMURA MAKOTO

TAMURA ATSUSHI

野村 クラシックや現代音楽の逆ですね。クラシックや現代音楽では、笑いを避けてシリアスに持っていくことしかありません。もって笑って楽しくやってもいいのに。

宮本 「Gift〜」でもそれは意識しました。実際にテーマは重いんだけど、しかも面で見てもいいわけじゃないから。

田村 そうですね。真面目なことでも、ちょっと笑いがあつたほうが伝わりやすいときがあると思う。たとえば今回、ひきこもりの人に向けて

「shell」という曲を作ったんです。僕も東京に出てきてからしばらく引きこもりだったので、他人事じゃないかなと思って。

野村 僕は作曲する時は、ひきこもります。仲間からは自閉症と言われるし(笑)。でも、そういう面はものづくりには大切です。

田村 ニュース番組で不登校の実態を知って、声をかけたくなったんです。外に出たらいろんな奴がいて、楽しいことがあるから出てみようよ、って。ライブでも、この曲のGo to School!と

いうサビの部分が一番盛り上がるんですよ。「ひきこもっている人のことを思いながら一緒に歌ってくれ」って言うの、本当にみんな一生懸命歌ってくれるんです。もちろん面白半分が入ってくる人もいんだけど、でもだんだん真剣になる。こうしてみんなで一つになって声をあげていけば、伝わることもあるんじゃないかなって実感しています。

すべては自分に返ってくる

宮本 お二人のプロフィールを拝見したとき